式子内親王家集　全

新四二

清水濱臣藏書

萱斎院集（前・御） 百首 春二十首

式子内親王

春もまつしるくみゆるはおとは山峯の雪よりいつる日の色

鶯はまた声せねと岩そゝくたるみの音に春そきこゆる

色つほむ梅の木のまの夕月夜春の光をみせそむるかな

春くれハ心もとけてあは雪のあはれふりゆく身をしらぬかな

見渡せはこのもかのもにかけてけりまたぬきうすき春の衣を（をとイ）

あと絶え（え）ていくへもかすめ深く我世をうち山の奥のふもとに

なかめつるけふはむかしに成ぬとも軒はの梅はわれをわするな

こすや（え）匂ふぬ宿まてうつる梅かえの袖なるうめの（のイ）木くれてゆくな

たか宿（里イ）の梅のあたりにふれつらん移りかしるき人の袖かな

梅の花恋しきことのいろそそふうたて匂ひのあかぬ（きえイ）衣に

文化八十二、五 校了

新古今春
花ハ今(いさ)そこもとなく見渡せハかすみうきたる春の明ほの(そ)

玉葉春
もろなくてゐるしまとかへふれハ花の香に春そ猶あるは
なかりて又なくきもかすもかはれゆく事をはつきなくてこそ
花もみる(よイ)暮松山のうへにつきぬ雲そさえたる花そしらくも
なき花し落とハ志る咲ちる霞たつくさの色ゆきてゆふけ猶かな
春風や(ま)やのきをとふめくむふりつもる雪猶かを(を)うき枕
なかりゆく有明の月なりけるけふ本のくおつる露ふくられのなも
鶯もねかく(きイ)ちハうれ井のうくれふれりな宿もそ花しき(くイ)
なるさしく今ハとむるふりかすも別るゝ雲かあけほのいつ(のくイ)
りふのことあめいろもえ別ちるハいうはの空なるの香ら

夏十五首

春のいろハかへる紀こゝもゆき残く昔ふもあくぬ御たかなを紀

新古今夏
時ちるいさとはいつか雲路より宿りそ(とそ)ていとしらかまな
わすれめやあふひをくさにひきむすひかりねの野への露のあけほの

(イニ此奇ナシ)
宿とやそらふる猶ふみける猶ぬよはりれハよはの一聲
雨そゝくむもあらそうふかき音信もまて(とイ)ぬれる袖うな(むイ)
五月雨ハ又ふきをつくりあしのやの軒もあやめ(まれイ)(とあれそ)きまつま
たきつるみなの音もふけふかり月のこゝろる古乃ゝ舟ゆ
なつかきは月い(きかえ)きかり庭の雨まそらうつかのうかくそ
さらにそて志はし志のゝ(ぬ)も昔ハ都しもせきてかへる古苑
夏秋ハやそうきふく五月の見るほともなくあくる山の端

(ながとりなく雨のこれるさや行く外山へうつる雨はちのほと)(△イ)

みしか夜の宿のゝれ井にいはき水の本週そうつ猿乃杉
松陰の岩ほにかゝる滝の音小涼しく過ふ日くらし秋て志
照そ日ハさやうる夏の衣かへしけをるてつる松乃下(下)うしるせ(せイ)

まくらにほかよふ板井のこゑきゝてふかきよこそ秋はかなしかりけれ

秋二十首

夜られかりふして秋は立田山風乃音よりいろやとふらん

嫁こぬると萩の葉風の告しよりさびしき事のかぎりぬる哉

新古秋

なかむれは我袂涼しくまきのはの秋の夕くれ

大かたは秋の色をも袖の露かくいかなる人よりもなき

吹むすぶ露もなさけもあはれとてしのぶる秋乃夕風

袖のうへは露のやどりと成ぬらむなれもさひしき秋のしら露

秋はたゞ夕の雲のけしきにてそのことなくもなかめられけれ

おほかたはくもらぬ月もあはれにてふける秋乃夕暮

かゝるへき露のあはれはたくひなき秋のゆふへはいかにしのはん

ふけゆくも月をかへりてなかむれは露のよもすからになく

夕霧もたちかさなりてむさし野の秋そかなしき

月のよもむかしのあはれなりけれはおもふ事には松むしの声

おしなへて秋の色なりふかきけり

新古秋 つれ〳〵とものおもふ月は雲なくて

新古秋 ふしのたかねをなかめても月は山のはにおもひぬる

あきはらのすゝきも月をとひなれて

ゆふきのこゑはさすてなくいぬてのみをしまる月のかけにかはる

新古秋 これもおもふもあはれぬ月はいとゞあはれなる

さやかなる山のはをよりいつる月秋ふかしや雲かかりなん

そらぬあきくさやおとろへぬれは庭の木の葉のちりゆく

冬十五首

神な月あらしに秋をさそはれて袖やまさてぬ木のもみぢかな

いつみをむすふ草のはハむすふしかてかへしはさうになきものつも
かはのやましみねハふかくいりあはぬやかけやまのはのえならん
玉葉冬
さひしさハ[redacted]宿のならひそ木葉ふしく霜のへにも添めつゝかな
冬されハ谷の小川の音たえて峯にゆきそふやまの嵐
あかつきに立みたるふく嵐にもおちぬ霰とハ身をしるさや
冬の池乃汀よさゆるあし鴨のむねにあへぬ霜もおもしろ
志ゐ葉つむ宇治の川舟かせましぬさをのしつくもかゝるわひ
くらくはいふも霜もあらハれ冬のふかき松風の音
かきれつる心もしくれぬ冬の川原よふとり啼
さえぬるよ雪はきえハあるあとゝゆく有明の月をまとふ
吹風にたくふちるハ色ぬなりあられ新まつあとゝうれ
おかふなり煙ふくこえて
さひしくされ雪ふるまゝの小野の山里

たえかれて待ちつらん埋火のまき絵の香社ハむすふ
やかて其の折ゝをへたらはつけハ神ふとふあゝ

恋 十五首

あつぬさき渡りそなられ人志れをとんハなみなみを渡るさほ川
かのふもとはハけふ忍ふ草ハ我もふよふらふもとらさし
新後撰 恋
夏山の草かくれつゝ渡る鹿のあとはふかくあともしらやまゝ[redacted]
志のふめやうつきし山よ初雲は立みえぬかゝはあともとふ
面のむかなかきしらぬ人をとおもひ旅のやかのふなからやくの袂
袖ともしほすめやとおもひつゝ家のことかふらふこゝな
續拾遺 恋
ここえつゝみぬよの月のおはめきてほすなるものまさかけそふ[redacted]
たゝのやまこも見えもや志らぬ夏よりゆめよさへぬるれ
いふのこゝをめておもひへをかきなの袖ぬれてたき川おとは流るゝかり

むかし見し袖のなごりは[illegible]
ふる波もたかしの瀬乃松風は松によるべき[illegible]
いかにせんうつりかはるも世中の[illegible]
ながむれば[illegible]
つれなくもなほ有明の月日へて[illegible]
新後撰 恋
忘れても[illegible]煙ある[illegible]

雑 十五首

苔むしろ岩ねの枕なれきてこゝろをあらふ山水の声
ちりはてぬ木の葉のまゝにふきもなくとまらぬ嵐の[illegible]
[illegible]草は[illegible]雨のよそにふくあらし[illegible]
まだなれぬ[illegible]おりふしの音は松ふく風の[illegible]
さらでもさびしき山の洞にきける昔に似たる旅の宿とみる

たちかへり袖さへぬれし涙のみ秋ふくかぜに[illegible]
山ふかくやどりてみし松のはにたか有明の月やすむらん
思ひやるかひもなき[illegible]あはれは[illegible]
玉葉雑
うらむとも[redacted]世のおもひ[illegible]袖の[illegible]
おもひいでむかしをしのぶ[illegible]ぬ涙に袖[illegible]
[illegible]
みしにもあらぬ世の中のむかしの夢の[illegible]
うき雲は風に[illegible]大空のゆくへもしらぬ果て[illegible]
[illegible]
君が代の[illegible]山菅の[illegible]

百首春 二十首

霞もたつ[illegible]春の色も[illegible]

雲井よりちりくる花ハかつきえて雪ぞちる谷の下庭　岩イ

雪とのミこゝろをおさめしおく山の松かけしらてさかりつくさん

神さひし今朝の雲まよ春日野のわかなつむらん

見渡せハ浦くくまてもかすミけりいつれの里ハふかく成らん

昔ふりあまたの年よ春ふりて誰かなかにも匂ふ梅かな

梅かえに袖をからてふあたら花香にはかくれ手に名残を

小夜ふけてとハれぬ人も月かけの袖にのこしる梅の匂ひに　絆イ

帰るかりのかねのミ野辺のかすミに白雲

けさハえれぬまつのおもかけにおほろ月夜にみそかに通ふ

ふかくとも雲をへだてゝ山をこえてあらぬかたのおくをこそ見ん

今朝みるに梢やいかにかすミつつ中ふかくれの花

我宿のいつれの峯に咲ぬらんまだ見ぬ人にそらにしらる

山里に春の音もなかなかにしら浪の花さかりてもかなしきを

こゝろ人のそこともしらぬ桜をもつらさもたなつかしむ

見ゆる日よしの山嵐の下ならひつかさとも

えくらぶれの里の音信なくかさねて花も

玉葉集
かれかりし[redacted]なりつらむや雲居の月

かすみよりひかはやまぶきの小坂をあかなくらみたへたる

うつろふたまとも雲に消えてこよひなるらん雲に中ふかき

夏十五首

玉葉集
たれかきくほとゝぎすまちあかしつるなかめもさそふ人もかな

ほとゝぎすまちあかしつるきくとはすりよ卯月の光ハなかるゝあらはれて

我宿の垣根の卯の花の山ほとゝきすなくをまちて

まつくていかならむつれなくもまた出つる月の影のしるし

さひしくも松風のあとを村雨よ山かくれゆく一声そするよ

新拾撰夏 [redacted]
むらしのにまたれしほとゝきすさぬなく声

手ふれなるみのうらみたつあれは露たちまれの陰みえて有るゝ

花秋のいろのかすみあれなるなつをのめしたり露なる

なつめつもとの雲おそ風ひさつゆしらぬかりの露の花

山かつのかやり火たえつゝもそれもおけいの外よ露かなしや

さくの露をきのところ夏りおきそてゝぬる村雨のこゝろ

あふ坂の関乃きさき村きさきそうてあくまそ涼ふ山の井乃ゐ

あつりやて夏はいつしか山陰のしみや秋のきもそいりゐる

新古夏 [redacted]
夕されの荻にもよふきもそれいかよ出ぬ秋としらふことふ

夕されいなつのゝ風ゆふそ夏のかたかけくらしの声

秋 二十首 一首夕こ

鳴ぬなりさきとわけみよ秋よかむしんのいろのこゑはすゝしん

庭の萱むらのしのふは深りれと秋の中ふよなりゆかれる

煙られいと紀はの山よ年をかく松しもかつかく蝉らな

草まてもあへかつ露のやとをまつくさきひの露

こちたきそのしのつら深かりつ露もけ衣きつゝかたる涼しき

むしの緒も籬の二重も知らつそなりにたる秋か夕されき

露空まとふ汁ははらてたとのつきそるみその萩の花もちる

ならもれは露のうらぬ袖さかき秋のさうかれの夕くれのほど

露ふかき袖つゝを気をおけりにも虫かなく秋の夕くれ

秋の松風しつまて空の雨さくらかれ涼しむせ

浅茅はさそ露もくらしの原つけハ虫の音さきて袖ふくをる

むつさしや月も秋のさら線きそ月をさふハこてしのこゑふ

秋かぜのふりゆくやましなの人は月ともろともにおもひやる風わけ
見られはなかなかも袖にうつすかたみに風のさわかしくおもふらののはら
谷の秋霧ゆく月に雲きえ（え）てはなれむかしに住けるその雪
続拾遺秋 [redacted]
なかむれは家ところさくなきもなくゆくへもしらぬ月の影かな
思ひやるゝ人かのかことかして月とあきとてとふらみつる哉
玉葉雑 [redacted]
今はとてかゝるとうくさん夕にも家をはおくられ山の端乃月
かけてぞ秋のおもひもやひとつかひたさに（今注イ）池の月影
深き秋のならひとてそこはれ立田川いく樹乃紅葉散りゆく
（なき）
思ひもうち落葉ゝ下にのこりしくれて立ちもうらや秋のなか

冬 十五首

神無月風はやまかぜみちかせ洞のうへのふもとの山への
冬のよは木の葉ふらかられもなき月の影ふかうれしくれる

（かとイ）
いくたびとよまつ宿て村しくれともぬれまの楢とあれにくらん
冬きて八深くしぬるもわきてうち紅葉乃紅はやれけなほかり
めくりくる時雨のさほとこまつて虚にまちとる楢の葉のした
たのむこゝろ紅葉の色あせくれ行月にゆくもこゝやれ乃さき葉
玉葉冬 [redacted]
なかめてもふくしこ秋空の紅ほけりけ田の霜よなかつて此かな
よけくかめ秋かの梢を形のつくるおとももみちを見て（らんイ）
新勅撰冬 [redacted]
おりおりのつく空さりこえし（きよけイ）谷のも冬は秋なくゆくけやかもかなら
雲のうへ秋変女の袖をりにしらん家もの思ひきく空はあの
さしてゆくおもひのたゆぬ（之）谷の秋乃松風ふけぬ霧されて
霜おきて樫森のそつるこゝのあしをとめてとや紅葉かゝかもとれ
高砂の松の木（よ）の雪（を）ちれ（を）そなの宿をきてしつらる
冬野の雪に誰かはとけん鶏のあとをたつゝ人のおとなくして

始めて揺んかときハこし月のいろふかくるあをゆ乃

恋　十五首

おきふしに涙もあまのいさり火のかのまくらにおもひ袖に
玉葉恋
たりふりしろもみたくこひぬ（を）ふらつゆにぬれ
気とはさそふらやしふりに涙をあけれ
思ひをあさ津山にもおしし袖のちりかなし
かりふりやしに縁をとへての夏かの（の）いふとしける
つる恋ハあふもへてしなりて今こそ涙（え）やまて
かうしまふし涙さしの久露のやとかぶるたけとなり
あさましやあさ乃のぬまのかつみも
かつみれまでも袖ハぬれけり

我袖のぬれてもかハつみにまつも花ハいろをそへせん
いろしらずとこれにけわさりけ寺の山のいそのこえる　袖の涙
身月のこひもうしみもつりて一つれをまきる
ときえ木の
ちきりやまりろにうつる旅ぞ染　袂に染　こそうけし
なれさしみえし川にみ　みれきせん
こそりの人への君を居しえてあれ　時（雨）や袖にかく
これのときの夢路に此頃のさしめなをうちまれ　（イ）

雑二十首

こひ人のあとさき見えぬ雲の中になるれハなるし世をすてん
いそ寺に二枚も見まし草の庵のむかひの山に出る月影
霧も晴しよそのあしくさわすれきしん（よ）くるは中山
思ひときまる（者）やれそとも小雲の露のいろや旅人のやと
なきわれハ浦の篠は浦のおともふるひの浦の夜のあの月
海舟のうきてしるをりはのとまあつまのこゑきこえれたなれぬる

あさましくそむく心の有さまをしてしをいそくなきはすをとゞめん

此歌雑の部に入るべし

はふりこのふみあらぬ世の中をさえへは神もいさそゆく
うれをはいまやの中もゆかりいかなる紀も来て淋世や
世中におもひみだれぬ宮やのそでもかくても月影
あはれ人はるかにほのもて春のふりさへ身をなき名を
まくふのいかまちうたるのしるそらのとおりふりあつる
きわひつさ紀の川波をへてもあきらうすさ松あふむかし
手かれてやまはまちぬ谷のくちのくちはのひともおもふ
二露の子ははかうひとらん君か代を松のうけふやなもかきん

建久五年五月二日
百首 春 二十首

私云此百首正治二年御百首歟

峯はなほ雪もやまねばふる里の風かよふなり春あらはれ路

新古春ア 百首 はつ春の分
山ふかきまさともしらぬ松のとにたえ〳〵かゝる雪の玉水

新勅雑ア
こゝろまくくさしのめのしきみ草はなのみをまめ

新勅春ア 百首の歌
にほの海や霞のうちにこく舟のまほにも春のけしきなる哉
あしひきの山のをとめも鳴はのにまたふりいつる春乃一聲
新後拾遺春ア
いろめやこ霞の未咲乃香ひく山のはのはのそら
神のさとにふる糸の梅はおとなりてよさをもつ緑の夏
新古春ア 百首こたてまつりし時
なかめつるけふハむかしに成ぬとも軒はの梅よわれを忘るな
今さくら咲ぬと見えてうすくもり春にかすめる世のけしき哉
ちる花ののこりさくらをはなにをしむへくもしける哉
峯はまたふれともにかすみていつれを春とよし野の里
新勅春ア 百首の哥中に
谷乃戸に咲さくらあれはかこみにしかいへをぬ
玉葉春ア 正治二年百首歌
うくひす乃をとつてそ一れ鶯は時しもまたすまなくさくらを
新勅春ア 百首こ歌の中に
あはれこゝろの山はかすみハむねのかゝるぬかのゝ人
続古春ア 題しらす
花のちるもうつるも花にかせにて志門のさきにも春もすゝ
風雅春ア 正治二年後鳥羽院に百首哥奉りし中に
花ちれハ木の梢に風をきゝて志らぬ雪のいくへともなく
続後撰春ア 正治百首歌奉りけるとき
いまはたゝ風をもいとはし吉野川岩こす浪にしからみもかな
新古春ア 百首歌の中に
花はちりその色となくなかむれハむなしき空に春雨そふる
ゆく春のあともとめて浪を雲とも思ひける哉
常ときもあらなくしむら鶯はなきてなかるらし枝にかゝれる

夏　十五首

風雅夏ア 正治百首の中に
をしらへいろのはなもよりまさりわかるゝ春に花ちるやとの藤なみ
玉葉夏ア 正治二年百首歌に
ちる花をやすらひて卯の花のゝのひとめの梢のこゑ
風雅夏ア 正治二年百首の中に
ほのかなる横雲の山の端の月に夜をかへてかゝるふ
新古夏ア 百首歌奉りし時
声ハしてくもちにむせふほとゝきす涙やそゝく宵のむら雨
新後拾遺夏ア 正治百首歌の中に
ありて是にふかき夜もしのはりをもあかりける

なり女秋空ハこゝろよりこそてゆきみむれならハ秋乃ゆふくれ

新古夏ア百首歌奉りし時
いましへとなけきならふ雨ハ秋の声のみして風そふく

かつをとこえ草とてもおもひし絵の夏のまつよ白ふたちそな

まつほとの風のこゝ夜のよハあきこえもきく秋たつらむ

風雅夏ア正治百首の中よ
まし山の風のみよりたのめれはさらにふなりし野への末かな

玉葉夏ア歌よみ侍しに
さよふかみ山わけしみちのおとき汁ハさひしくなりぬこの松の風

玉葉夏ア
池水をさむみのうつしよこきふれぬのつよいろかはりやまむ

月の色も秋ちかしとやさよふかくやとれの森になくらむ

風雅夏ア正治百首の中よ
あき風とかりふやつゝきかれの空をふきまてゆくなる哉

秋 二十首

新古秋ア百首歌奉りしよ
うつ絵の紅葉の袖よおちそへならしまよ床の秋乃みちかと

風雅秋ア百治百首の中よ
さもあれハまつよふる月よやすらしめてあきの袖の露

日くれ秋てらもはきぬる山陰よ又おとろえ入あひの鐘

新古秋ア百首歌奉りし時
あしもかきに庭のあさちふむしもわき露のそこからむしの声

玉葉秋ア正治二年百首歌奉りし時
つき舟のいらさの風よいとろけハ夢秋あふさよもなく鶉

續後撰秋ア秋の歌中よ
なき露つなくのまさそ秋のこゝろふく住をも海のうちらの萩

新勅秋ア百首歌の中よ
白露の色とも本くいおもかれと萩の下をくて秋とし見ゆらむ

新勅秋ア百首歌の中よ
秋とへはあさともおけるよ山のそよいさよふきの中まれの宿

新古秋ア百首歌奉りし時
なきさきほゝこ雲ふうしきもよわくなるめのとそふ秋乃さよ衣

續古秋ア正治百首の歌よ
かり衣うれなりし梓弓河辺の野への萩きなし〳〵の露

風雅秋ア正治百首の歌よ
萩のかれかりし秋洞乃おくこ露ふけゆふかりゆる月かけの衣

新古秋ア百首歌奉りし時
かりめよいぬ秋かり外の宿もかれ野ふも山ふも月やなかめん

月
こゑふかり山のさしくも月さやく十市秋さらよからもすり鐘

風雅秋ア正治二年百首歌の中よ
ふけて絵ぬ袖さへ色ふ出絵とや露をきもそよ学の末枯

同
志ろ紀なあさちハちハく庭の霜人め?へきも冬秋をまさハ

新古秋ア百首哥の中に
秋の色ハ籬にうとく成ゆけと手枕なるゝねやの月かけ

續後拾雑ア題しらす
ふるにハむなしく秋?もうらかれ?へちまち月?けり

あさちハつゆしも秋ふ長月の有明の里におもひきえつゝ

新古秋ア百首哥の中に時秋分
桐の葉もふミわけかたく成にけりかならす人をまつとなけれと

續拾遺秋ア正治百首哥に
おしへもこらひそう乃秋のなかふけりやよなうらけ悲しき(のイ)

冬　十五首

新千載冬ア正治百首哥の中に
神な月みむろの山ハ山おろしにくれなゐくゝるたつた川かな(ゐ)(かゝるイ)

(志)あきはてゝハおもふ諸もかハりけり庭ふて秋の色ハなかりけり

新古冬ア百首哥の中に
見るまゝに冬ハきにけり鴨のゐる入江のミきハうすこほりつゝ(も)(してイ)

風雅冬ア正治百首の中に
けさみれハ遠方秋のみちハ霜もそへあらしそおつる庭のあさしも(一あ…)

あれはてゝ冬の夜すからかせそふくねさめのとこの風もさむけつ

續古冬ア百首哥のうちに
あしからも秋ものもあへぬ草のはにふりてかれなくおのかさ

日吉ア正治百首哥の中に
あられふる野辺のさゝはら宿かりて夢ハゆめにもなりぬへきかな

新古冬ア百首哥に
さむしろの夜半の衣手さえ〱て初雪しろし岡のへの松

風雅冬ア正治百首の中に
もれてくる月も高ねによはき嵐の袖やまとふを吹かな(え)

あふくむハ庭にも秋のけさ冬のしたをかしの嶺の跡

新勅雑ア百首哥の中に
あまつ風氷をわたる冬の夜の未通女の袖をミかく月かけ

新古冬ア百首哥奉りし時
日かすふる雪けにまさる炭竈のけふりもさひし大原の里

續後撰冬ア题冬の哥とて人々よみ侍りし中の歌中もたはかりたる
わか宿のちるふりや冬のなかりぬめくみをたのむあまりすき行舟
おのつからいかゝハ糸ゝくるゝ塩にもつくあまれしと思ふる(老)

恋　十首

新古恋ア題しらす
しるへせよ跡なき波にこく舟のゆくへもしらぬ八重のしほ風(そそイ)
かくとふハいひきぬまに秋になりつゝしるへなきにもかるゝかな

新古恋ア百首歌の中より
夢にても見ゆらんものをなけきつゝうちぬるよひの袖のけしきハ

同
わか恋ハしる人もなしせく床のなみたもらすなつけの小枕（木）

忘れてやゝとていはの池のむらかつらたえしかつらもふ袖にしかりき

新勅恋ア百首歌の中より
さきの世のちきりもひとつくもちる波のうちはらはぬ袖そ

あふことハうつゝのゆめのそれつゝしいさてやたれをうらむへき

新拾遺恋ア百首歌の中に
我袖ハかりにもひめや紀の中のあさちか原のへふるしも露

新古今旅ア
續後拾恋ア百首歌の中より
あふ事ハいまはかきりの袖の色も（え）かはらてゆくよ（ほ）とゝ袖とハしる

清き（村）いりぬなかめんとしもなといひけりしそうり秋の夜の月（虎イ）

旅 五首

續後拾遺旅ア歌（次和の歌イ）
しらぬ（え）雪ふるさとゝおもひしは草の枕のさむき旅寝の中山

新和歌ア
あはれとやおもふらん（え）かり寝して夢よりさめし袖のはかなき

續後撰旅のこゝろを
旅人のおきつる小笹の露ふかしひさしくいかぬならのちさとを

新古雑別ア百首歌の中に
ゆくすゑハいまいく夜とかいはしろのをかのかやねに枕むすはん

同
松かねのをしまかいそのさよ枕いたくなぬれそあまの袖かハ

山家 五首

風雅雑の歌の中より
つゝみハはまにふこゝろり山かけのしはしかりにもあととむるとて

新古雑ア百首歌の中に（小山家の歌を）
今ハわれ松のはしらの杉の庵にとつへきものを苔ふかき袖

風雅秋ア正治百首中より（里先）
山の□峯のまつむらつきはひつゝ雲さわるらし（かつるイ）秋かの彩

はちのゝひ人こそそよ絶えぬの山より枯らしきて月ハちとる河

山里ハ窓にたえぬ（え）松のおときに志のふ昔のことにて

鳥 五首

新古雑ア百首歌より
あかつきのゆふつけ鳥そあはれ（え）なるなかきねふりをおもふ枕に

新續古今雑ア正治百首の歌より
なく鳥のおもひにハ志らぬ秋のこゝろこそ木には志られ

すのうさひおりひつゝさらにハ志のゝめ秋声すたにもさふ暁のねさき

新千載雑ア郷之次
たのしやな風にまかする波のうへに鳩のうへ紀ものさてもすみよし
風雅秋ア正治百首の中に
うちわたしたのあきらかなる月の志るしとや見ゆる
祝 五首
君か代は千代松かえに吹く風もこゝろしてふけ君かよはひに
新古賀ア百首の中に
君かへん千代のためしもわかなつむ野辺の末くれは
いくよせのいくよ萬代か君かそへ雪月の友と見る
亀の尾の岩かねをへてみなかみの絶えぬ流の色
新續古今賀ア正治二年百首の中に
君かちよまつの川のさゝれ石の苔むすまて岩となりつゝ
~~布の外勅撰小集歌~~
雖入勅撰不見家集歌
[redacted]
千載春
なからへはおもひいてゝも見む春の花のさかりの月の色
[redacted]
賀茂のいつきおりゐて後まつりのみあれの日人のあふひ
[redacted]
日吉
いそきつゝ神のまつりにあふひ草かけて年は經まし
[redacted]
同賀
うごきなき萬代をしるへきみ山の松
同
百首歌の中に君の御代を
同日
神の御代人のこゝろもなるなりけりそとしたのもし
雑
賀茂のいつきの紀のさしへ
麦井手のいろのりもうつ河のかけ
小つゝみわれちよ
[redacted]
同雑
みやしろや神のちかひしてこゝろ神そしる

新千載雑下部に入
たかしまや風にさはらぬ波のうへに鴫のうきねのさむくも有哉
風雅秋下正治百首の中に
うちしめりあやめそかをる草のしたにはかりそめのつゆ

祝五首

君か代は千代松かえにさきそへて仲もしらて忍ふなりけり
新古賀下百首歌奉りし時
あめのしためくむ草木のめもはるにかきりもしらぬ御代の末々
いくとせのいく万代か君か代に雪月花の友を待みむ
新続古今賀下正治二年百首歌の中に
亀の尾の岩ねをつたふ滝つせのしてゆく水の色もかはらす
君か代にあふへきはるの川のさゝれ石の苔むす岩となりつゝ

[redacted]
雑入勅撰不見家集歌
右の外勅撰小事歌

同秋
[redacted] 読人しらす
草も木も秋の末葉はみえゆくに月こそ色もかはらさりけれ
同賀
[redacted]
うこきなく猶万代をたのむへきはこやの山の峯の松かけ
同
百首歌の中に恋の心を
袖の色は人のとふまてなりもせよふかき思ひを君したのまは
[redacted]
賀茂のいつきかはりて後…
みたらしや影たえはつる心ちして志かの浪路に袖そぬれにし
同雑
[redacted]

新千載雑ア部に入
たゝしや風にみたるゝ波のうへに鳴のうきねのさても安かる
風雅秋ア正治百首の中に
うちむれて八十うちあまりふかき草のしけりて下すゑりつるかな

祝五首

君か代の千代松かえに咲そへて竹もたえせぬこゝろなりけり
新古賀ア百首歌奉りし時
天の下めくむ草木のめもはるにかきりもしらぬ御代の末々
いくよへの山の末代の君か代に雪月花に友にちよよまむ
亀の尾の滝の岩ねをくへにみなたるもしてりのみの色そ松
新續古今賀ア正治二年百首歌の中に
君か代を ち 千代の川のさゝれ石の苔むすまても岩となりつゝまて

右の外勅撰に入る歌

雖入勅撰不見家集歌

千載集春歌

同恋
恋歌 百首歌よみ侍りける時恋の歌
たのしや枕さためぬうたゝねに夢のみちとふ人はかよはぬ

同 百首歌の中に恋の心を
同旧
神の心は人のとふをもなかりけるをよひかきおけるそ思ひしたのまゝ

雑歌
賀茂のはきうち澄てはかなくかへりて人のまたの日
麦井手のこゝいのりとらりし河事かいらと侍りける年
小つゝきくれちゝ侍りける

同雑
みちのくしや籬のまつもなかりして志か浦なみに袖てぬれなむ

雑歌

百首歌の中に法文の心を詠ませ中に普賢経の唯此経を不

桐壺巻をいつらんと

同 釈教
ふかき夜をてらすおもかけもおくるは月の影をそこにけ

百首歌の中に神祇の心をよみ侍りける

同 神祇
きりしまのむらさきのいはほの神さひてしめぬか花のゆき

[redacted]
家のやへ桜を

へしをくかしこき将明親王封ほくはなれはかへつかへしける

新古今 春
八重にほふ軒はのさくらうつろひぬ風よりさきにとふ人もかれ

[redacted]
百首歌よませ給ひける時

之し 惟明親王 ほにしきうつろふまてにみし桜もとへとはいそてむかしなかりけるなむにハ

同 夏
たちはなの花のにほひをさそふ風のおとさへいつしかきくやまの夏

同 同
夕立のはれてすゝしき夏のよのたひらかにふく山の日くれの声

[redacted]
題しらす

同 秋
ふかきそらさのみつれなかりける月をおもひかねしま山の秋月

同 同
擣衣のころを

みかのはらつきぬるさののおとに夏さあてねさふ神のうきをそてうかる

[redacted]
題しらす

同 冬
冬さむみそのかれ木のかくれゆくこのはのうへにくまなき夜の月影

同 同
忘れてはうちなけかるゝ夕かな家のをちこちてらす月かと

同 同
[redacted]
雪ふかき夜ゆめまつよのあけかたにしらゆきのふりつもるらん

あらしふくみねのまきのはかくれなき山のはの月

せき山のみねのまつかせふきわたるよはのあらしにかよふ月影

しつかなる松の上風

いつくにもあはれはおなし月なれとかならすそらのくまのなきかは

同 雑
[redacted]
いつきのむかしをおもひ出て

わすれしなそのかみ山のふかき夜にむかしをしのふありあけの月

ありあけの月のころ山里にて式子内親王にまいらせける

百首歌の中に法文の心を歌よみ中に普賢経の唯此経王不
捐捨といへる心を
同釈教
みなしことなりぬる身にもおくるゝは月の影こそそうけ
百首歌の中に神祇の心をよみ侍りける
同神祇
さりともとたのむこゝろは神さひて久しく成ぬかもの瑞垣
百首哥の中に [illegible]
[redacted] 家のやへ桜を折らせて惟明親王におくりける
新古春
八重にほふ軒はのさくらうつろひぬ風よりさきにとふ人もかな
[redacted] 百首歌よませ給ひける時
えし 惟明親王 ゆかしきうつろはてぬさきは八重桜とくもいそてぬかんハ
同夏
窓ちかき竹の葉すさふ風の音にいとゝみしかきうたゝねの夢
同
夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたふく山にひくらしの声
[redacted] 題しらす
同秋
ふくるまてなかむれはこそかなしけれおもひもいれし山の端の月
[illegible]
[redacted] 百首歌の中に忍恋
同恋
玉のをよたえなはたえねなからへは忍ふることのよわりもそする
同
忘れてはうちなけかるゝ夕かな我のみしりてすくる月日を
同恋
君まつとねやへもいらぬまきの戸にいたくなふけそ山の端の月
いきてよもあすまて人はつらからしこの夕くれをとはゝとへかし
[redacted] いつきのむかしを思ひ出て
同雑
ほとゝきすそのかみ山のたひまくらほのかたらひし空そわすれぬ
秋月のあかゝりけるころ山里より式子内親王におくられける

百首歌の中に法文の心を中に普賢經の唯此經王不
相接離といへるを

同 釋教
みちびきし法にあふぎのおぼつかなくは月の影をぞかけ

百首歌の中に神祇の心をよみ給ける

同 神祇
さりともと身のむかしは神さびてふりしぬかものみづかき

[redacted]を
家のやへ桜を折てまいらせ侍りし親王おほせにつかはしける

百首歌の中に 同 ちる花を はなに思ひまよへる

新古 春
八重にほふ軒ばのさくらうつろひぬ風よりさきにとふ人もがな

返し 惟明親王 ときはつかまてこの八重桜とくもいそてもあらハ

[redacted] 百首歌の中に夏の時

同 夏
窓ちかき竹の葉すさぶ風のおとにいとどみじかきうたたねの夢

同
夕立の雲とまりて夏の日かげふく山に日ぐらしの聲

[redacted] 題しらず

同 秋
ふくるまでながめはてかれおもひもいれじ山のはの月

[illegible]

同 戀
[redacted] 百首歌の中に忍恋

百首歌の中に

同
さりともと待し月日ぞうつりゆく心の花の色にまかせて

同
いきてよもあすまで人はつらからじこの夕暮をとはばとへかし

[redacted]
いつまでのむなしき

同 雑
おしなべて心のうちに山のはのかげもかくれぬ月をみるかな

五月のあやめのころ山里より式子内親王におくり侍ける

暁明親王おほせられける時百首歌よみてたてまつりける中に
の月　よし

同
山里に我身しつめは忘れつゝ都のかたもあきの山里

堀河院の御時かくきさせ給ひける百首歌に

同
その世にはえ我らし昔はとわかれしにもあらぬ世をふるかな

百首歌より

[redacted]

同
なかめして初雪そはあけつ晩の末を峯に山風そ吹

百首歌の中に毎日晨朝入諸定のこゝろを

同釈教
あかつきの暁ことにてらすらむとはまよふ秋の露そおかれし

新勅春
[redacted]　百首歌の中に
たち帰りこそしらぬ梅かえの花のまことに散りける

同秋
[redacted]　百首歌中に
尋ねてあれ人はのかつ知らぬ松の戸にいくへもきたらむ蔦は身かくしそ

同冬
[redacted]　歌しに沢
吹風ふきく吹くはみよしのに松かせ風のこゝろもあらしまつ

[redacted]
百首歌の中に大悲代受苦のこゝろを

同釈教
われかはりつき人のかはりにみはかれてかのわかれやたちかへりなん

[redacted]　百首歌の中に

同五
いのちをもなけかし身もうきもなきむかしき法のたまもの種

[redacted]
堀京極摂政大納言にまかりにける時かくなんいひおこせける
あてなる身の末八百大小付くつかれしかる

同 しのくれの四ゝ 人とめぬやとの外の 雪の中に 隣に あきすみか

続後撰 春
ふるさとの春をわすれぬ八重桜これやみし世にかはらさるらん

[redacted] 読人しらず

同 秋
をしねもる山田の秋のかりほにはなれぬやとめ袖の露かな

家の守乃中に

同 冬
つゆやかは人に月草秋をへてあのこすゑにおもひあへるとは

同 恋
いつまてかむすひし川かせのかけてこそしられぬ恋にわひつゝきて

忍恋のこゝろを

同 恋
君ゆゑといふなはたてし消もせん人を秋のうきの末まてもこよ

恋の歌の中に

同
君か為よそへも袖をぬらしめとも知らしなかこしり見ゆるはなるとも

読人しらす

同
契りしを中々月に人忘れはてなむしきりて袖のなみたに

同
人忘れはてあはぬ袖にくらへてや恋しきの波乃しほなく

同
あきはきぬ秋へもしらぬ秋ふかみあけはつる宿のふる里

[redacted] 読人しらす

同 雑
草のあとにとふかしる身ともあはれは知らぬむかしにいかてあはれ

続古今 秋
[redacted] 秋のそしめ秋寄

秋きては月もあはれと秋風の身にしむ色のかはる秋

[redacted] 正治二年百首秋寄に

同 恋
されはの中乃おもひのうちつけにいぬるも人に忘れぬ恋

百首歌の中に

同
あつめぬれはうつこともいはて風にかはたのめぬ涙への身をなきさき

読しらぬ

同
はなくてもさてしも思ひしけりふあはぬんもさそあなたれは

同
君をおもふこゝろはかりはいにしへの恋しきさまにかはらさりけり

続拾遺春
[redacted] 百首歌中に
ふく風ものとかき御代の春なれはちるてふことも花はしらなれ

同賀
[redacted] 百首歌の中に
むすふてふ末もかはらし君か代にあふのつもれる菊のした水

新後拾遺雑
[redacted] あきら経
おほかたの身をしる雨はおりしもあれたゝ我袖の涙なりけり

同
経られし池とあはれ嫌しきやうにすきなるふるきはしらさりけむ

玉葉秋
[redacted] 題しらす
さらてたに身にしむ秋の夕くれは松をふく風そ身をしる

同旅
[redacted] 百首歌中に
出てこし跡はさなから絶えなぬ末もとほみのいくへかすみん

続千載春
[redacted] 正治百首歌奉りし時
みよし野は花のさかりとなりにけり嶺の白雲たちそふ

[redacted] 正治百首歌奉りし時
あはれなりかしこき里の露わけて誰かしるらむ露のかゝる袖かな

続後拾遺冬
[redacted] 百首歌奉りし時
冬きてはしくれに風やぬるきのやまに木枯吹けは梢の色そさひしき

同雑
[redacted] 百首歌の中に
さりともとなかめしおもての柴の戸をいつしか花を峯にみし

新千載雑
[redacted] 題しらす
なかれゆく水ものとかにめくりきてまためくらんとも風やん

新拾遺雑
[redacted]
これのみや思ひいてけむ我世をしらは上中下のなかのうき世をそし

[redacted] 題しらす

同
君をまもるちかひしあれはいはし水への恋をもさゝけ頼はるゝ

続拾遺春
[redacted] 百首歌中に
ふく風ものとけき御代の春にこそちるをおしまぬ花もありけれ

同賀
[redacted] 百首歌の中に
むすふ末もかはらし君か代に露のつきせぬ家のしみ水

新後撰釋教
[redacted] あらまし
露の身に結ひつる縁はおりしもあれしはしの法の花のちかは

同
経られし法をあへ嬉しさよかさねてふかきいはしらさりしや

玉葉秋
[redacted] 題しらす
さりともとたのみしも秋の中にくれぬる松をふく風そ身にしむ

同旅
[redacted] 百首歌中に
出てこし跡は雲井に隔りぬ末もとほきみのいくへの山

続千載春
[redacted] 正治百首歌奉りし時
山さくらいはねにかけて咲けれは浪のはなもあらし吹

同雑
[redacted] 正治百首歌奉りし時
あはれなるかしらの里の夕霧にむかしこそ露のかゝる袖かな

続後拾遺冬
[redacted] 百首歌奉りし時
冬きてはしくれに絶ぬ浦きのやまにかゝる時雨の雲のかゝらぬそなき

同雑
[redacted] 百首歌の中に
さひしさはたれぬらむ柴の戸にいつくをはかる峯の松かせ

[redacted]

同雑
[redacted]
つかのまの袖にかゝる秋のいろをさかしら袖にかへるる

新[redacted]百首歌に

新後拾雑
玉のみはかのうへよきぬ人や月をはあまりみねといひけん

[redacted]部卿隆

日吉旅
おのつからあふ人あらはことつてよみやこへとこそけふはゆくとも

新[redacted]百首歌中に

新續古春
なかむれはこゝろいふしへのはなもれてかりゆかんにほふ梅かえ

[redacted]部卿しる

同雑
世をもとめあらぬものとおもひなからいけるふしの

いつきあかしにて

文化九年五月書写之
其ところ〳〵によりて校合
しおく　草亭
[印]

泊洦舎蔵